

地中海の博物館にある九谷焼

佐々木 達夫・佐々木 花江

2005年の夏、ギリシアのコルフ島を訪ねた。コルフはイオニア海に浮かぶ、碧い海と土産物屋と観光客の島である。6世紀からビザンチン都市となり、1386～1797年の間はベニス支配下に入る。15世紀中頃から16世紀にビザンチン時代の砦を補強して古砦と濠港を作り、アドリア海イオニア海の軍事・貿易拠点となる。その後は19世紀にイギリスが巨大な新砦を築く。

海岸を見下ろす広場の海側に1818年建築の瀟洒な3階建て旧パレスがあり、今はコルフ・アジア美術博物館となる。所蔵点数は1万点ほどで、日本の陶磁器、浮世絵、根付、鏝、中国の陶磁器、ネパールの仏画などを展示している。

その中に3点の九谷焼があった。いずれも細い赤線で主文様を器全面に描いた上絵磁器で、瓢形瓶、銚子、鉢である。底部下面に九谷造、九谷、福という銘が角線内に赤絵で記される。赤色の他に染付、色釉、金彩が加わるものがある。地中海の博物館に九谷焼が展示されるのは珍しい。

博物館の所蔵品は、ギリシア人マノスとチャツィヴァシリオの個人コレクション、さらにシノソグロ、アルマナチョス、コラスらの寄贈品で構成される。マノスはギリシア大使としてオーストリアに赴き、フランスにも住み、ウィーンとパリで中国、朝鮮、日本の美術品を購入した。それらのコレクションを1919年、ギリシア国に寄贈し、そのコレクションを核として1927年に設立されたコルフのアジア美術博物館の館長となり、翌1928年に歿した。

チャツィヴァシリオはインドや日本に赴いたギリシア大使で、日本や朝鮮の美術品とヨーロッパに輸出された中国磁器をコレクションし、博物館に寄贈し、1998年に歿した。

日本の陶磁器は江戸時代が中心となり、九谷の他に伊万里や京都、薩摩など、染付や上絵のきれいなものが多い。中国陶磁器の数はさらに多く、各時代の品を網羅して展示している。九谷は19世紀末から20世紀初にマノスのコレクションとなったのであろう。

いずれの九谷焼も赤色を主とした細線の文様を全面に描いている。飯田屋八郎右衛門などで有名な九谷焼の赤絵細描である。細い赤線できれいに文様を描いた美しい技巧的な美術工芸品として収集されたのであろう。

器全面を細い赤色で描く九谷赤絵細描様式は、江戸時代後期の宮本屋窯で完成した。中国明代16世紀の



飛行機から撮影したコルフ島。上がベニス古砦、下がイギリス新砦。2つの砦に挟まれた古い町が観光地となる。

金欄手と比較できる19世紀の九谷様式の一つである。宮本屋宇右衛門は天保2年（1831年）に吉田屋窯から経営を譲られ、八郎右衛門が絵付主任となって完成した赤絵細描は、飯田屋、八郎手と呼ばれる。明治初には赤絵細描様式の九谷焼は日本全国に販売され、すぐに海外へ輸出され好評を博した。

瓢形瓶は下方を円や扇形、方形に染付線で枠取り、梅、石榴、笹、果樹などを描き、上方は蓮弁文を染付線で枠取りし、赤細線と金彩で格子状文や唐草文を塗り潰すように描く。赤絵と金彩で描いた器は豪華繊細である。銚子は地面の鳥と、樹木や草葉を、赤絵と金彩で描く。鉢は内外面に四方に思いのままを意味する吉祥の如意形を配し、内面を牡丹花文と格子状文、唐草文で埋め、内面は獅子を中心に樹木や雲、花、牡丹唐草、格子状文を描く。色釉も用いる。宮本屋であろう。

石川県物産の海外輸出品の代表となった九谷焼は、九谷焼の陶器商人が神戸・横浜で外国人に販売し、万国博覧会出品によって輸出の好機をつかんだ。明治9



赤絵染付金彩瓢形瓶（九谷造銘）と赤絵金彩銚子（九谷銘）。



赤絵黄・緑彩色鉢（角福銘）、宮本屋窯

年(1876)フィラデルフィア、明治11年(1878)パリ、明治26年(1893)シカゴ、コロンプスの万国博覧会には高い技術の美術工芸品が展示された。明治21年(1888)には九谷焼で生産された80%が海外に輸出され、生産量では瀬戸、美濃、有田より少なかったが、輸出額では日本一となった。欧米の好みを取り入れた輸出九谷の全盛期であり、産業としての九谷焼の好況ぶりを伝える。

しかしその後は九谷焼の輸出は減少し続け、大正13年(1924)には輸出に占める割合が10%まで下がった。九谷焼は国内市場に向けて生産されていた。

九谷焼の特徴の一つに海外貿易が挙げられる。19世紀後半にヨーロッパへ大量輸出され、日本の美術工芸品を代表するものとなった。その九谷焼をパリやウィーンでギリシア人がコレクションし、地中海に浮かぶギリシアの観光地コルフ島の博物館に展示している。海外で評価され受け入れられた九谷焼の輸出全盛時代を語る美しい器は、現代の九谷焼をどのように見ているだろうか。

19世紀後半の九谷焼海外輸出の歴史的な位置づけを考えるため、拙著『日本史小百科・陶磁』（近藤出版社、1991年）掲載の関連文を以下に引用し、その一部に九谷の名前を挿入してみる。

江戸時代は、陶磁器生産が全国各地で行われ、幕末

頃には広く庶民まで陶磁器を使用するようになった。それぞれの土地の粘土を使用するので、地域的な特色のある製品も多い。民間の資本で築窯されるばかりでなく、各藩内の重要な産業の一つとして藩の庇護を受けることも多かった。一方で、日本全国をおおう商圏を持つ大規模生産地も存在した。また、京都などでは個人作家も登場し、それまでのような無名の陶工の商品ばかりでなく、芸術的な作品も登場する。

中世以来の伝統を受け継ぎ、それを発展させた窯業地帯と、新たに技術を導入して窯を築いた地域がある。中世は陶器が作られ、施釉陶器と無釉陶器があった。江戸時代に入ると、施釉磁器が生まれる。そのため、施釉陶器と施釉磁器の二種類が主要な製品になる。多色釉を使用した華やかな陶磁器、精緻な文様を駆使した陶磁器なども生まれ、華やかな生活用の陶磁器が作られた。主要な産地は有田や京都、瀬戸などで、そこから多くの陶工を呼びよせた新たな産地が各地に誕生した。既成の産地も、優秀な陶工を招聘して技術の向上を計った。江戸時代を通じて生産量の多かった地域は有田と瀬戸の二地域である。京都や信楽などの近畿地方の窯もそれに次ぎ、九谷はその周辺の窯である。

肥前地方は、唐津窯を基盤に革新的技術の開発によって、新製品の磁器を作った。中国陶磁器の模倣を経て、日本独自の製品を作るようになり、伊万里として販売した。有田や波佐見、三川内の染付が主要な製品である。古九谷様式、柿右衛門様式、鍋島様式、古伊万里様式などの様式化された文様と雰囲気陶磁器は、肥前の代表的な製品である。とくに有田は17世紀後半から18世紀前半に、染付や色絵を海外輸出用として生産し、ヨーロッパに販売した。18世紀後半から国内販売に力を注いだが、19世紀初から磁器生産が全国で始まると、市場占拠率は下がった。

瀬戸は中世以来の窯業生産地の中心地で、前代からの施釉陶器を引き継いだ。江戸では17世紀から焼き物のことを瀬戸物といい、販売する店舗を瀬戸物屋と呼んでいた。瀬戸の製品は瀬戸物問屋を通して関東地方など東日本に多く販売された。しかし、19世紀初に肥前の磁器に対抗するため、新製品の磁器生産に力を注ぐ。九谷もその瀬戸の影響を受けた窯の一つである。

新興の地方産地は、藩や富裕な商人等が肥前や瀬戸の陶工を呼び寄せて興ったところが多い。磁器を作るか、陶器を作るかは、原料となる粘土の種類にもよるが、どちらの系統の技術者が来たかによっても決まる。原料と技術に恵まれれば、より質のよい磁器をめざす産地が多かった。地域社会の需要に応じるため磁器と陶器の両方を作ることが一般的であり、九谷も多くの日常生活用陶器と食卓・装飾用の磁器を作った。

18世紀は殖産興業政策のもとに、国産の専売制がと

られ、藩を中心とする産業が発展した。陶磁器の生産もその一貫として、各藩が保護の手をさしのべた。問屋制度の確立も販売を促進している。各藩が経営した藩窯には様々な形態があった。藩の什器や贈答品として焼き、一般の人々の使用を禁じたのは御留焼。城内で藩主が趣味で焼くのは御庭焼。藩が必要とする時に民窯に頼んで焼かせた窯も藩窯と呼ぶ。さらに、藩が財政的な援助を与えた窯も藩窯と呼ぶこともある。しだいに藩窯は、趣味の茶陶から殖産興業としての陶磁器生産に移る。九谷は加賀藩及び大聖寺藩が財政援助をすることが多かった。

江戸時代は大坂・京都・江戸が大消費地で、金沢は名古屋と並んでそれに続く都市であった。武士階級に加えて、人口の多い都市の新興町人層まで消費者となった。商品流通の増大に伴い、全国各地の城下町でも必ず陶磁器が使用された。近世城下町や城内の発掘で、どこからでも大量の陶磁器が出土している。

地方の城下から出土する陶磁器は、それぞれの地域色をもつ陶磁器をかなり含んでいる。瀬戸や肥前の製品がすべてではないこと、それぞれの地域の窯業生産が活発になり、地元で販売している。こうした状況は、各藩が殖産興業に成功したことを示す。江戸時代は全国市場を持つ生産地と、地域色をもつ小規模産地が併存することになった。磁器のみに特化したのは全国市場をもつ有田と波佐見で、その他は磁器と陶器、あるいは陶器のみを作った。江戸時代後期には、全国各地で染付や様々な色釉で装飾された変化に富んだ陶磁器が作られた。磁器生産も幕末には各地でさかんになり、九谷もそうした地域窯の一つである。

各地の藩では、窯焼から運上銀（税金）をとった。税金は窯の坪数によって決まったから、窯を小さくする対抗策も取られた。窯の大きさや構造を、技術面からのみ考えることはできない。

有田は文政年間に町全体を焼き尽くした大火に会い、19世紀初めは一時的な不況に陥る。このため、陶工が職を求めて日本各地に散り、新たな窯を興す役割を演じた。江戸時代末には、大量の染付碗皿を日本全国に販売し、活況を取り戻す。北前船も北海道まで莫大な量の有田磁器を運んだ。九谷の生産は常に有田の動向に影響されている。

中国染付は16世紀後半からヨーロッパへ多く運ばれ、1635年頃からオランダ商船による中国磁器の運搬量が増大した。しかし、十年後に明が滅び、清が成立するという激動の時代を迎えた。中国から良質の磁器の輸入が難しくなり、中国染付に替わるものとして、誕生したばかりの日本の染付が注目を浴びた。出島のオランダ商館を通して、莫大な量の伊万里磁器（有田磁器）がヨーロッパに輸出された。オランダ東インド

会社の記録では、日本磁器を買い入れた最初の年は1650年で、その時の買い入れ量は磁器145個である。そのわずか9年後1659年には、56,700個の磁器が注文された。日本の磁器生産技術は注文に応じて急速な発達を遂げ、ヨーロッパへ本格的輸出が始まる。

ヨーロッパの王侯貴族や富裕な階層は、質の高い中国や日本の磁器を競って集め、宮殿や城、邸宅の室内装飾品として扱った。宮殿や貴族の館の中で、豪華できらびやかな趣味が流行した。陶磁器に対する感覚は、日本とヨーロッパでは違いがあった。江戸時代の日本では、多彩色と過剰文様で飾られた大型陶磁器は好まれない。

中国では1684年に遷界令が解除され、1730年代からオランダ東インド会社が広東（広州）で中国人と直接取引し、見本をみせて大量の染付を注文輸入した。安価な中国磁器の大量輸出と競合し、伊万里磁器はオランダとの取引が宝暦7年（1757）で最後となった。その後は長崎商館で私貿易も行われたが、寛政11年（1799）にオランダ東インド会社が解散し、有田の磁器はヨーロッパ市場を失う。再び輸出するのは明治初になる。九谷の海外輸出は、有田の再輸出期と重なって新規に始まる。

18世紀は日本の磁器が日本国内で消費された時期である。様々な大型品を作った有田も、国内向けには碗と皿の小型品を大量生産した。江戸時代の日常生活に必要な飲食器の販売に活路を見出している。九谷も有田磁器流入を阻止するため19世紀初に復興される。

ヨーロッパへの磁器輸出の隆盛と衰退は、日本の磁器生産体制の発展、国内流通の質的、量的な面、生産する器種と器形に影響を与えた。19世紀には、薩摩焼も大量にヨーロッパに輸出され、京都も薩摩を模倣した京薩摩を輸出した。九谷もそうした時代のなかでの輸出であった。

明治時代の幕明けは、江戸時代以来の日本の陶磁器産業のありかたを変えた。幕末には各藩の殖産興業として、全国各地に陶磁器産地が広がり、地域色ある陶磁器が作られていた。しかし、急激な社会の変動による富裕な町人の没落は、陶磁器の需要階層を変えた。各藩の保護もなくなり、流通機構も変わり、陶磁器の生産地や販路が江戸時代と変化していった。

明治時代の特色の一つに、海外市場の開拓がある。陶磁器の輸出は、貿易の振興を国策とした明治政府の援助もあり、しだいに増加した。その直接の切っ掛けは、欧米で開かれた万国博覧会への出品である。幕末の慶応3年（1867）パリ万国博覧会には、幕府、佐賀藩、薩摩藩が出品している。このとき江戸の瑞穂屋清水卯三郎はパリに出掛け、陶磁器成形用の石膏型や、絵付用の酸化コバルトなどの絵具を持ち帰った。近代陶磁

器技術の導入はこの時に始まる。加賀藩は出品していない。

明治元年(1868)にお雇い外国人教師として招かれたドイツ人化学者ゴットフリード・ワグネルは、西洋の技術と材料を日本にもたらした。明治2年、服部杢庵は西洋顔料による陶器絵付(陶器画真着色)に成功し、有田を訪れ技術を伝える。同年、佐賀藩は長崎にいたワグネルから酸化コバルトや顔料の製法、ドイツ式石炭窯の設計と焼成法を学んだ。ワグネルは明治3年4月から8月に有田に滞在し、技術指導している。新しい技術や材料は京都や瀬戸に伝えられ、明治の陶磁器産業に影響を与えた。明治3年には、京都に舎密局が設けられ、技術や材料の化学的研究を始めている。

明治6年(1873)のウィーン万国博覧会は、日本政府が初めて参加し、各地の物産を送った。中でも陶磁器を主とする工芸品は、江戸時代以来の見事な手仕事を示し好評を博した。このとき、有田から納富次郎、河原忠次郎、京都から丹山陸郎が、西洋の新技术を習得するために渡欧している。万国博覧会終了後も各地の窯場で調査研究し、石膏型、水金などの顔料や釉薬を入手して帰国した。これらは有田、瀬戸、九谷、京都の窯場に急速に広まり、ヨーロッパ風の窯も築かれ始めた。

明治9年のフィラデルフィア博覧会、明治11年のパリ万国博覧会でも、日本の陶磁器は多くの賞を得て、明治初期の陶磁器の水準が高まった。陶磁器の海外輸出は、明治14年には明治5年の158倍になった。しかし、明治中期以後は、急激な輸出に伴う大量生産の結果、質の低下や安易な西洋趣味を生み、海外の批判もあり、輸出が減少していった。

陶磁器の組織的な製造、輸出を目的とした会社も設立された。明治7年には起立工商会社ができ、浅草に工場が建てられた。深川には瓢池園、小石川には江戸川製陶所、牛込には友玉園などが相次いでできた。これまで陶磁器産業の伝統の少ない東京や横浜に、新技术を取り入れた陶磁器会社が設立されたのも、明治時代の特色である。有田でも香蘭社や精磁社が設立され、輸出品を生産している。京都府や石川県、鹿児島県でも、輸出向けの陶磁器を多く生産した。

国内でも、内国勸業博覧会が開かれ、工芸作家の発表の場となり、陶磁器の発展を支えた。こうした明治時代の陶磁器の特色は、装飾性の豊かさである。狩野派や琳派、四条派の絵画を模倣したものも多く、画家に下絵を描かせることもあった。こうした状況は、明治時代も後半には、装飾やデザインが陳腐で、手間をかけた手先の技巧に走る者を多くした。

明治20年の陶磁器の製造価額は次のようになった。佐賀県は38万905円、岐阜県は31万7529円、愛

知県は30万3073円、石川県は18万8196円、京都府は18万209円、長崎県は7922円であり、全国で188万4612円である。佐賀県が全体の20.2%で最大の生産地であるが、岐阜県と愛知県を合わせると、それを上回る32.9%、石川県は10%、京都府は9.6%で、ともに佐賀県の半分の製造価額である。瀬戸・美濃、有田、九谷、京焼の順番であり、波佐見はその次である。

明治時代の陶磁器も生活用品が主である。輸出品を中心に、絵画的で技巧的な装飾が流行した。伝統的な型にはまる精密技巧をこらした製品を生んだが、個人の清新な感覚を通した新鮮な芸術品は少なかった。板谷波山、沼田一雅などの個性豊かな陶芸作家の誕生は、明治時代末から後のことであった。

大正時代の陶磁器も、生産量の点では伝統的な生活用品にあった。大正3年の日常容器としての陶磁器の製造価額は、次のようになった。愛知県は664万2352円、岐阜県は204万2439円、京都府は131万8184円、佐賀県は129万1021円、石川県は62万7465円、長崎県は27万4053円であり、全国では1565万6856円である。

明治20年に比べると、愛知県の生産量が16%から42.4%へと増加する。岐阜県は16.8%から13%、次の京都府は9.6%から8.4%となり、佐賀県は20.2%から8.2%と減少する。石川県も10%から4%に減少する。長崎県は0.4%から1.8%となる。地域別の生産額の推移が読み取れる。このうち、有田を中心とする西松浦郡の製造価額は、大正2~4年の3年の計を見ると、内地向が7割5分、外国向が2割5分である。

九谷焼が19世紀後半に海外輸出される背景には上記のような国内・国外の事情と推移があり、他地域の動向と関連することが多い。九谷焼をいわゆる古九谷と結びつけ、再興九谷を吉田屋中心で説明し、色絵のみを誇大に取り上げる、という地元の一部に見られる傾向は九谷焼を誤解させる。有田や瀬戸の生産状況、北前船による流通、ヨーロッパの宮廷趣味、藩の政策、明治政府の貿易振興策、そうした様々な要因が九谷焼の生産や製品に影響していた。内部事情中心の解釈は妄想を生み出す恐れもある。